製塩

富士川から大井川にかけての静岡県中部の駿河湾沿岸では、昔から漁業のかたわら塩づくりが行われていました。

明治二十七年の『静岡県水産誌』には「製塩業は蒲原地方においては砂浜広闊なれば従って塩畑多く産出多額である。甲信に輸送する物資に魚、干魚、塩魚とともに塩がある。また、大崩海岸の浜当目、志太郡の吉永村に産し、吉永村の塩畑は一八五枚あり、年間百日就業し、塩畑一枚につき一日二俵を産する」とあり、大井川町吉永地区で塩づくりが盛んであったことがうかがえます。

●「吉永塩」の発祥

吉永の塩づくりが始まったのは江戸時代。『駿河記』（一八一八）によると、志太地域は中世末から近世初頭にかけて大井川の中川筋の氾濫の被害を度々受け、宝永八年（一七一一）、幕府は谷口村（現・島田市阪本）に二十五間の川除け堰を築きました。しかしこれによって川の本瀬が対岸下流の上泉村や相川村の堤防へと押し寄せ、毎年のように破堤しては一帯の田畑が河原と化し、とりわけ享保五年（一七二〇）の上泉村の大破堤では吉永村や高新田村が大きな被害を受けました。そこで生計を立てるため吉永村の人々は塩づくりを始めたということです。

もともと吉永の海岸は海が急に深く、波も荒く、海岸はがれきが多いため塩田には適さず、当初は一時しのぎのために始めた塩づくりでしたが、度重なる大井川の出水で田地の再開発が進展せず、領主本多氏も